

Newsletter 第4号 2004年1月

目次

2003年度年次大会をふり返って

招聘講演「イスラームの文化的深層を探る」をきいて

シンポジウム「多様性と統合の中の文化アイデンティティ：EUを例に」をきいて

オープン・フォーラム「多文化社会へ向かう日本：課題と挑戦」に参加して

学会参加記

第1回研究会報告

理事会報告

懇談会報告

研究会のお知らせ

編集後記

2003年度年次大会をふり返って

大会委員長 和田純（神田外語大学）

都心からやや離れた幕張まで100人を超える方々にお越しいただけるとは、大変な感激でした。発足からまだ2年に満たない学会にとって、今回の大会はひとつの試金石になるのではないかと感じておりました。学会として本格的に離陸できるのか、新たな研究の世界を開けるのか、インパクトのあるアウトプットを生み出せるのか、すべては学会員の皆様の熱意とコミットメントにかかっていたからです。

答えは明瞭でした。冒頭の招聘講演には150名近い方々がお越しになり、シンポジウムやオープン・フォーラムはもちろんこと、各研究発表のセッションも熱気にあふれたものとなりました。できるだけ目線を広げ、できるだけ学際的に多文化の関係性を問おうという試みは、大きな期待感のなかで着実な一歩を踏み出せたのだと思います。触れる機会の少ないイスラームの文化的深層を考え、現在進行形で変容が続くEUを見つめ、多文化社会へ向かう日本国内のあり方を問うという流れも、アメリカの一極化が目立つ世界であえて立ち止まり、足元を見直す有力な観点になったのではないかと思います。

今回のテーマ「新しい共存のビジョンを問う：せめぎ合う多文化の狭間で」は、これからも問われ続けられるべき大テーマです。ご協力いただいた学会員の皆様に感謝しつつ、ともに、さらに充実した次回大会を期待したいと思います。ありがとうございました。

招聘講演「イスラームの文化的深層を探る」をきいて

中川典子（流通科学大学）

去る11月に神田外語大学で開催された多文化関係学会に出席の機会を得た。本稿では特に、「イスラームの文化的深層を探る」と題された片倉もとこ氏による招聘講演について報告したい。2001年9月11日のテロ事件以降、メディアを中心にイスラム文化がある種の偏見をもって扱われてきたことは否めない。片倉先生の口から語られたイスラム文化の様相に関するその一例、一例がまさに「目からうろこの落ちる」ような経験であった。例えば、我々が「聖戦」と解釈している「ジハード」は「大ジハード」（日常の努力）に対する「小ジハード」（努力することも許されない環境での最後の手段）の部分的解釈に過ぎず、真の「ジハード」の意味は、「異文化との共存が可能な里を築くための努力」であること。「Islam」はイスラム思想を土台にした日常の生活様式であり、「多様にしてひとつ」を意味する「タウヒード」にはすべての存在がその価値において平等であるという意味合いがあること。また小文字の“islam”はイスラム教徒の社会を示し、これは「何人にも宗教を押しつけてはならない」という思想に基づいており、この考え方が西欧文明の波及に見られるような侵入の形をとらず、伝統地域文化に対するローカル化という形で影響を及ぼしていったこと、等等。お話を聞きながら、そこに内包される寛容性と多様性がイスラム教がここまで世界中に広く伝播している理由だと納得できたような気がする。最後に、21世紀における文化の定義に関して、もはや「ある集団の生活様式」とは言えず、「地域ではなく、その人に属した文化が中心となる」との「国家」から「個」への文化のパラダイムシフトを指摘されたが、そのことをより深く探求することは多文化関係学に関わる我々にとっての新たな課題であろう。

シンポジウム「多様性と統合の中の文化アイデンティティ：EUを例に」を聞いて

ギブソン松井佳子（神田外語大学）

世紀転換を経験した現代世界は高度な情報科学技術の発達と浸透のもと、グローバル化の趨勢に加速度がつき、「均質化」と「多様化」というベクトルの異なる動きの中で、文化の画一化とそれへの反発が渦を巻き、文化と個人レベルにおけるアイデンティティが危機的状況を迎えている。今回のシンポジウムではこのリアルタイムの切迫した問題意識とまっすぐに向き合うことになる。地域的には「多様性」と「統合」を体現するEUとオーストラリアを取り上げながら、文化的多様性を尊重しつつそれを統合の原理につなげいかにして共存のヴィジョンを実現しようとしているのか、あるいはそのプロセスにはどのような困難な問題を抱えざるをえないかを検証することになった。多文化共生の条件を支える普遍的な共通枠組みとして個人の尊厳、人権尊重、多様性の認知が確認される一方で、マルチレベルでの個別の関係性の構築が要請される。今回のシンポジウムの中では、EU統合への圧力の中で反動的に強化されつつある文化的アイデンティティの指摘がなされたものの、概していえば「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」やオーストラリアにおける文化／言語領域における多様性確保の政策や教育にみられるように、多様性の相互理解と協調性の充実こそが統合の共通基盤として了解されつつあるという現状認識を共有することになった。いずれにせよこのシンポジウムに参加して私自身は、近代のもつグローバル化の両義性としての「多様性」と「統合」が決して二項対立的に捉えられるべきものではなく、今後の共存様式の表裏一体の必然的展開ではないのかという印象をもった次第である。<いごこちの悪い>文化間の対話はまだまだこれからが本番という気がする。そのためには経験科学（実証的研究）と粘着力のある哲学的思考が、お互いがお互いの触媒となる形で機能を果たしていくことがますます重要となるであろう。

オープン・フォーラム「多文化社会へ向かう日本：課題と挑戦」に参加して

呉 小莉（城西国際大学）

パネリストの一人として、「多文化社会へ向かう日本：課題と挑戦」というオープン・フォーラムに参加した。司会の加藤幸次先生がこのセッションの趣旨について説明した後、3人のパネリストがそれぞれの立場から、日本が多文化社会になるための問題と課題を出し、解決方法を提案した。まず、私が在日中国人教員として、コミュニケーションの視点から留学生の問題を取り上げ、その教育可能である方法について意見を述べた。次に、長年、川崎市役所で在日外国人の仕事をしてきた山田貴夫さんが、自らの川崎での経験から在日外国人、特に在日コリアンへの市民援助を踏まえて、情報発信、政策提案できる市民団体の存在の重要性を強調した。さらに、日本と関わりの深いイタリア出身の新聞記者であるロベルト・マジさんが、事例を上げ、日本とイタリアとの間にある文化の相互浸透という現象について言及し、また、長年の体験から、日本が多文化社会になるのは難しいではないかとの疑問を投げかけた。最後に、ディスカッサントの役を勤めた鈴木さんが自ら行った新宿での外国人調査を含め、コメントを出した。また、フロアからも各問題について貴重な意見が出された。こ

こういった形のフォーラムで、様々な角度から、色々な意見を交換することによって、日本の多文化社会へ進む途中の問題を再認識することが出来、さらに、社会的な関心度を高めたとされる。また、私自身が参加者として、学んだことが多く、このフォーラムでは非常に意義の深い、考える刺激を与えられた討論がなされたと思っている。

学会参加記

松永 典子（福岡工業大学社会環境学部）

今学会の講演、シンポジウム、オープンフォーラムにおける一連のテーマの流れの中に、この「多文化関係学会」の目指しているものを提示しようとする大きな野望を感じた。そのような大きな方向性には大いに賛同する。それとは全く別に、会員相互の「関係性」という視点から勝手な要望を述べさせていただきたい。

私の場合、前年度までは留学生教育に従事しており、「多文化の共生」は言わば自明の課題としてあった。今思えば、対象とする留学生自身にもそれは日常的に意識されていることであり、こちらが躍起になって取り組む必要もなかった。それは、今年度から日本人学生を主対象に授業をするようになってから改めてはっきりとした形で顕在化したとも言える。「日本人学生の意識を変えなければ、とても多文化共生社会など実現できるものではない。」その思いが強くなってからは試行錯誤の連続であった。今回、この学会で発表させていただいたのも「異文化間教育や多文化教育に取り組んでおられる先輩諸氏に教えを乞いたい」という切なる願いのゆえである。学会発表の本来のあり方からははずれるのかもしれないが、私は「多文化関係学会」には「同じ価値観や目的を持った者同志が腹をわって話し合える」、そのようなざっくばらんな「関係性」を持ち続けてもらいたいと思っている。そのためにも各セッションや研究発表と研究発表の間など多少フリートークする時間的余裕があればたいへんありがたい。今回は進行の遅れや移動などで時間に追われ、非常に慌しかったという印象を否めない。その点が唯一残念な点であった。

「多文化の共生」という課題ほど言うは易く行うは難しい課題はないであろう。多文化共生社会の構築に寄与できる研究や教育を推進していくためにも、学会員同士が相互の課題や問題意識をぶつけ合いながら相互理解を深めていくことは必要かつ重要なことであると考えている。

清ルミ（常葉学園大学）

都合で一日目しか参加できなかったが、招聘講演、総会、研究発表、シンポジウム、懇親会と盛りだくさんのスケジュールで、大変充実した一日であった。まず、これだけのメニューを企画段階から当日の準備までお世話下さった理事、企画委員の先生方と開催校神田外大の先生方、スタッフの皆様にご心から感謝申し上げたい。総会の会計報告で初めて知ったことであるが、理事会や大会準備は完全な手弁当で、諸先生方のご厚意によるものである。今後、会運営に携わる方々の経費実費は学会で負担する方向をぜひとも探ってほしいと思った。

研究発表の時間が他学会より長いことは、発表者・聞く側双方にとって有難いものであるが、発表によっては時間を有効に使用しているとは思えないものもあった。予稿集に最長45分と書かれていたが、「最長」の解釈をもう少し明確にする必要があるように感じた。

参加して最も充実感のあったのは、最後のシンポジウムであった。3人のパネリストがそれぞれのご専門とご経験に裏付けられた話をわかり易く展開して下さり、フロアとのディスカッションも活発で興味深いものであった。ただ時間が限られているので、司会者は進行に徹した方が良かったのではないかと。パネリストを兼ねる場合はプログラムに司会兼パネリストと明記した方がいい。2時間の枠では、フロアとの議論を活発化するには自論を展開するパネリストは3名で十分ではないだろうか。

佐藤万里江（立教大学大学院 大学院生）

多文化関係学会は、様々な学問的見地からの多文化関係に対するアプローチを試みる場として大変面白い。また学際的なアプローチの重要性とその手法について考えることのできる素晴らしい場だと思う。

非常に個人的な話で恐縮だが、学際的で多代的な研究科に身をおくこととなって半年が過ぎた。今振り返ってみると、そこでのさまざまな経験は文化摩擦であり文化交流であった。学会でも、先生方がおっしゃられていたように、文化交流というものは一筋縄ではゆかない。しかし、文化の相互作用によって生み出される物は驚くほど大きいし、今、それが必要とされているのではないだろうか。

特に、今回の学会に参加しての私個人としての収穫は、多文化関係という「場」について考える機会を得たことだ。例えばオープンフォーラムでのディスカッションはそれぞれの文化が交流する「場」が鍵であり、その具現化された実践や試みの紹介として私は拝聴させていただいた。それは、外国人留学生と日本人学生の接点を作る場、地域の構成員として外国人が社会参加する場、そして漫画やアニメという場を通して関係する日本とイタリア、というように。多文化共生社会の実現のために如何なる「場」が用意され、もしくは、如何なる「場」が発生しているのかという問いに対するヒントを得たことになる。それでは、如何なるプロセスでそれは実現するのだろうか。この点を深めることについては、私の今後の課題とし、研究や身近な多文化関係のなかで活かすことができれば幸いと思っている。

丸山真純（長崎大学経済学部）

学会員ではない私から見た年次大会の感想を率直に述べさせていただきたいと思います。

私が強く感じたのは研究領域の広さです（おそらく、それは発表者の専攻の多様性をも表しているのだと思います）。新しい学会であり、発展途上ということもあるのですが、研究発表に関しては、留学経験を扱ったもの、教育の文脈のもの、捕鯨やフェア・トレードを考察したもの等、ミクロなものからマクロのものまで非常に多岐に渡った興味深い発表内容が多かったと思います。石井会長が「この学会を作るときに、異文化コミュニケーション学会という名称にしようと思ったが、政治・外交・経済の問題も扱いたいので、多文化関係学会という名称にした」と述べられておりましたが、そのことをよく反映していたと思います。私の専攻する異文化コミュニケーション論では、ミクロな文脈の研究が多く、マクロな研究が非常に少ないと感じます。その意味でも、私はこの研究領域の広さ（とりわけ、マクロの問題も論じること）を高く評価したいと思います。

最後に、部外者の無責任な要望を一言述べさせて下さい。このように多様な発表で参加したいセッションが多かったにもかかわらず、同時間のため、参加できないということがありました。これはある程度避けられない問題ですが、セッション数を減らし、一つのセッションの中での発表数を多くするといったことができないものかと思いました。

研究会報告

多文化関係学会 第1回研究会報告

2003年6月7日（土）、立教大学12号館第2会議室で第2回多文化関係学会研究会が開かれた。プログラムは午後1時から4時までで、第1部が講演とディスカッション、第2部では今後の研究会についての意見交換が行われた。第1部では、講師に立教大学の甲斐田万智子先生を招き「多文化共生と人権問題～人身売買の廃絶に向けて」というテーマで講演いただいた。子供/女性の商業的性的搾取に対してどのような法的取り組みがなされているのか、人身売買の実態はどのようなものかについて、実質的なデータを基に紹介されたが、なかでも地球規模で最低70万人から200万人もの人々が毎年人身売買されているという事実は衝撃的だった。カンボジアからタイに2度も売られた少女サリーを取材したビデオ、人身売買の禁止を訴えるため制作された広報ビデオでは、大人達によって無惨にも虐待され搾取される子供達、騙されて売られる女性の現状が浮き彫りにされ、見ていて息苦しくなるほどであった。

講演の前半ではセックスワーカーのうち30%は18歳未満というカンボジアが中心だったが、後半になると日本もこの問題に無関係では決していないことが指摘された。日本の性関連産業に、多数のフィリピン、タイ、最近ではコロンビアなど中南米やロシアの女性が流入してきているという。その多くが日本のやくざがらみの人身売買によるものであるにも関わらず、被害女性は被害者というより不法入国者として扱われているのが現状で、日本における法的整備の欠如（人身

売買を処罰する国内法が整っていないなど)が問題点のひとつとして挙げられた。

貧しさから子供を売る親。自国内外を問わず女性や子供を買う人達。人身売買を容認し被害者を利用する社会。その背後には貧困、経済格差、教育の問題などが複雑に絡み合っている。国際社会での政治的、法的取り組みが必要であることは疑いもないが、人が人を売買し、性的に搾取することの暴力性、犯罪性を一般市民レベルで認識することが何よりも大切であると実感させられた貴重なセッションであった。参加者数25名(うち非会員9名)(文責:灘光洋子)

第2部では小林登志生氏司会で研究活動活性化のための懇談会が第4会議室で開かれた。

理事会報告

多文化関係学会第6回理事会議事録

日時:2003年6月7日(土)16:00~20:00於:立教大学12号館地下1階第3会議室

参加者:石井会長、林、久米、和田、杉本(な)、岡部、御手洗、徳井、灘光、杉本(裕)、小林、御堂岡、掛札

< 報告事項 >

1. 会計報告

和田理事より、2002年度決算報告がなされた。決算報告書については監事2名の監査を経た後、総会で承認を図られる事となる。

2. 会員報告

現時点での2002年度会員数は、一般125名、学生40名との報告がなされた。入会申し込みを受けた後の一連の事務、及び、承認手続きについて、改善案が出され、承認された。今後、入会申し込み受理 受理した旨メールにて先方に連絡 持ち回り理事会で承認(1週間を期限とする) 先方に会費振り込み用紙を送付することとなる。

3. ニュースレター

徳井理事より、第3号の内容について報告があった。学会誌案内、次回大会について、特集「私と研究テーマ」、著書紹介、文献紹介などが盛り込まれ、計12ページ以上になる見込み。完全版下を電子データとハード・コピーにして事務局に送り、事務局から業者に発注することとする。6月末には発送の予定。

4. 学会誌報告

杉本なおみ理事より、以下の3点について説明・報告がなされた。

- 1) ISSN、及び、ISBN番号の取得
- 2) 査読システムの構築:査読委員の自薦・推薦を依頼する。
- 3) ロゴの決定:ロゴの説明をNLで簡単に紹介する。

また、英語学会名の変更(Intercultural Multicultural)については、E-MAILと並行して、NL郵送時に簡単な説明文を同封することで通知し、会員から異議がなければ了承と見なすこととする。

5．事務局報告

小林理事より、今後の事務局体制の建て直し（発送・発注業務等幕張事務局が行う等）について報告があった。今回、封筒、NLなどの担当業者への連絡・発注に関しては、事務局と杉本なおみ理事が連携し進める予定。

6．第2回年次大会・大会準備委員長報告

和田理事より、大会案内、ホテル案内、研究発表応募要領等を、NL郵送時に同封し送りたいとの報告があった。また、大会プログラム、参加申込書、新規会員名簿を、9月半ばまでに送付する予定。

.審議事項

1．第2回大会プログラム

- 1) 企画委員会が提案する大会テーマ「新しい共存のビジョンを問う - せめぎ合う多文化の狭間で」は、採択された。
- 2) 計画されている3つのオープン・フォーラム（イスラムとアメリカ関連、EUの実験：言語・文化関連、日韓中関連）については、以下の提案がなされた。

多文化関係学らしい、独自の＜切り口＞を再考する必要がある。（例：政治／外交ではなく＜文化＞の視点から何が言えるのか；日本との関連をより鮮明に打ち出してはどうか）

焦点を絞るためには、会員の背景・関心の幅がどのようなものを把握する必要がある。

大会テーマと関連を持たせ焦点を絞った議論を行うために、「日韓中の文化的共存」、「日本社会における文化的共存」というサブ・テーマで、2つのオープン・フォーラムにしてはどうか。

学術誌の在り方について会員の声を聴くセッションをオープン・フォーラムと並行して設けてはどうか。

- 3) オープン・フォーラムの内容については、今回の提案をもとに理事メールで論議し、必要であれば企画委員会を再度開き、決定することとする
- 4) 学生会員の研究発表奨励金制度（大会参加費、及び、懇親会費免除）を設けることが決議された。

2．石井ファンド

石井ファンドを、具体的にどのように運用していくかについては、次回の審議に持ち越すこととなった。

3．ニュースレターという用語

「ニュースレター」に決定。

4．今後の研究会に関する方針

現在、継続審議中。

5．幹事制度の創設

久米理事より、「理事を助け特定任務を遂行する」といった会則を設ける方向で、幹事制度を設けてはどうかとの提案がなされ、決定した。

6．学会費の繰り延べ案

学会費の繰り延べ案について議論された結果、会費は徴収することに決定。

7．次回第3回の大会

現在、東京女子大学が候補として挙がっている。今後、関東圏以外での開催も検討する必要もある。

8. その他

- 1) 東山理事の代行として活動している灘光理事に、引き続き理事を依頼したいとの提案が出された。
- 2) 個人宛ですむ内容であれば、理事メールには流さないようにとの提言がなされた。

多文化関係学会第7回理事会議事録

日時：2003年11月14日（土）18：00～20：30

場所：メディア教育開発センター 8階セミナー室

参加者：石井（米）、石井（敏）、林、久米、小林、白水、杉本（な）、徳井、灘光、松田、御手洗、御堂岡、和田、掛札（書記）

<報告事項>

1. 事務局報告

- （1）現在会員数215名。会員増強のため、ポスター作成、新聞社関係との連絡が必要との提案がなされた。
- （2）会員名簿は、改訂（メールアドレス等追加）をして来年6月をメドに発行予定。

2. 会計報告

会計報告は2002年4月1日から2003年度について報告された。（ただし、学会設立以前の出費があるので2002年4月以前の収支もそこに盛り込まれた。神田外語大から10万円の寄付があったことが報告された。

3. その他

（1）総会においては、会計報告を事業報告（ジャーナル、ニュースレター、研究会等の活動）と連動して行う必要があるのではないかという指摘がなされた。

（2）2003年6月7日、立教大学にて研究会が開催された旨、報告があった。第1部：講師：甲斐田万智子氏（立教大学）演題：多文化共生と人権問題—人身売買の廃絶に向けて 司会：灘光洋子（城西国際大学）参加者約25名。第2部、研究会活動の活性化に向けての懇談会：司会；小林登志生（メディア教育開発センター）。

同日午後4時から7時まで2003年第1回理事会が同大学で開催された。

（3）ニュースレター委員会より、会費徴収、大会案内を兼ね、2003年8月に第3号を印刷発行した旨、報告があった。次号はホームページによる発行のみ。ただし、発行の案内は全会員にメール連絡する。

（4）学会誌委員会より、投稿規定英語版が完成した旨、報告があった。学会ホームページに掲載するほか、各大学でも外国人教員に向け配布してほしいとの依頼があった。また、(a)査読委員の自薦、他薦を募り、査読委員のプールを作る、(b)紀要に全査読委員の名前を記載する、(c)一人の委員に依頼する論文数は3本を限度とする、などの報告がなされた。

<審議事項>

1. 前回議事録確認

添付資料で、前回理事会での議事が確認された。

2. 石井ファンドの使用方法について

若手研究者のための奨励金として使ってはどうかとの提案がなされた。例えば、優れた発表をした者、優秀な論文を書いたものへの賞などを、その賞の金額を決めて出すことにより学会の方向性や特色が出せるのではないかと意見が出された。

3. 関西地区の研究会開催について

2004年3月11日、関西大学で八島智子氏（関西大学）と畠一彦氏（川崎医療福祉大学）を講師に招き、研究会を開催する予定。どのようにして、関西地区で学会活動を展開すればいいのか、これから検討する必要がある。ポスター作成、インターネット検索でアクセスしやすいキーワードに工夫をする、地方新聞に投書の形で紹介するなどが、対策案として挙げられた。

4. 関東地区の研究会開催について

2004年3月13日、立教大学にて猿田佳恵子氏（立教大学大学院）と北原賢三氏（佐野学園）を話題提供者として招き、2003年度第2回研究会を開催することになった。また、2004年度第1回研究会を、6月12日、青山学院大学にてクリス・オリバー氏（立教大学）と三輪真木子氏（メディア教育開発センター）を話題提供者として招き開催することが決定された。

5. 研究部会設立について

研究会はオープンな形で、若手研究者や大学院生が気軽に参加できるような勉強会の要素も取り入れ、日本各地区で継続的に行うことが肝要との意見が出され、参加費、講師への謝礼について検討した。一応の目安としては次の通り。地区研究会で学会員以外の人に講演あるいは話題提供してもらい、謝礼が必要な場合、謝礼自体は出さないが、5,000円から10,000円程度の「お車代」を出す。その場合の額については各地区の研究会担当者が諸条件を考慮して決める。尚、研究会の参加費についても、会員と非会員に分けて研究会担当者が決める。

6. 2004年度6月の理事会役員選挙について

選挙管理委員会を設立し、選挙の形式を決定する必要がある旨、話し合われた。形式に関しては、全国区と地方区に別ける、直接選挙で理事の半数を選出し、残り半数は選ばれた理事が間接的に選出するなど、様々な意見が出された。次回大会は旧役員が責任を持つ形で準備し、新役員は補助役を勤めながら業務の引き継ぎを行うという流れが現実的ではないかとの見解に基づき、来年度は、9月改選とし10月の全国大会の前日に新旧の役員が理事会を開催し、実質的役員交替は2004年4月にしてはどうかという提案がなされた。

7. 理事の業務分担内容の再検討

全国展開や会員強化等の担当があいまいであるので、それらの代わりに渉外担当理事や地区研究会担当理事、学術会議担当理事などが必要ではないかとの意見が出された。また、地域別研究会の設立について、当面は、関東、関西地区に分け、その他の地域でも（例：北海道、中部、九州地区など）検討することが提案された。

8. 2003～2004年度予算について

ジャーナルにどれだけの予算を付けるかについては、保留。幹事制度には、どの程度予算が組めるのか検討の余地がある。（徳井理事が中国在住のため半年活動できない間、ニュースレター関連補助業務について、他の理事に兼務を依頼するか、幹事を採用するかを早急に決定する必要がある。もし、幹事を依頼するとなると、どの程度の交通費・報酬を見込むのか。）

9. 2004年度全国大会開催場所について

日程としては、11月中旬には各大学での入試作業が集中していることや11月末の学会誌論文締め切りに近すぎることを勘案して、それより幾分早い10月下旬に、東京女子大学で開催する案が最有力となった。また、大会準備委員会システムの必要性が指摘された。

10. 次期理事会の場所と日時について

2004年3月に、立教大学か東京女子大学で開催されることが提案された。

懇談会報告

場所： 福島県ブリティッシュヒルズ

日時： 2003年9月13日

出席者：石井米雄、ギブソン松井佳子、久米昭元、古賀幸久、小林登志生、晨光、杉本裕二、清ルミ、灘光洋子、徳井厚子、ヒダシ・ユディット、御手洗昭治、三輪真木子、和田純（敬称略）

多文化関係学会に会員となっておられる方が、「この学会の特色は？」とか「他の学会とどう違うか」などと訊かれることがあって、どのように答えていいかわからない、という発言に対して、言語関係やコミュニケーション、あるいは異文化教育関係の学会と比べて、もう少し広い視野で、しかも理論的に取り組もうとしているのではないかという意見があった。当学会の研究方向としては、文化、関係性がある意味できわめて多様なものを包含するので、多文化間や異質の背景を持った人々の関係性を問うたり多文化化していく国内における共存のあり方を考えることもできるのではないか。また日本が直面している行政的社会的教育的な諸問題を見つめ直し、共存をめぐる具体的な問題解決をめざすこともできるのではないか。さらには、文化接触におけるトレランスについて扱う必要性がある事も指摘された。

別の提言としては、従来の異文化コミュニケーション研究に欠けていたものは何かを明らかにする事でユニークな方向性を打ち出していくことができるのではないかと、政治、経済と文化的アイデンティティーの問題はこれまで切り離して議論されてきたが、これらにもっと関連性を持たせることができるのではないだろうかという意見が出された。政治家個人の資質などについても文化の側面から議論できるのではという主張があったが、それについては意見が割れた。関係性ということばは対人関係などにも含まれるし国家的な側面でもあるので、当学会ではマクロなレベルからミクロなレベル、さらにミクロなレベルからマクロなレベルへの関係性を追求し、パラダイムの転換をめざす方向性をもつことがいいのではないかと言う意見も出た。最後に文化という言葉は曖昧ではあるが、それが故に際限なく研究ができるということが指摘され、当会合は終了した。

研究会のお知らせ

研究会のお知らせです。会員、非会員を問わずふるって御参加ください

2003年度 関西地区研究会

日時：2004年3月11日（木）午後2時～5時

場所：関西大学吹田キャンパス岩崎記念館 4階 多目的ホール

話題提供者：

1. 八島智子先生（関西大学） 「異文化接触と第二言語・文化の習得ー滞米日本人留学生の調査を通して」
2. 畠一彦先生（川崎医療福祉大学） 「国連から見た日本ー30年間のスイス勤務を終えて」

終了後、懇親会の予定。詳細は2月初旬に会員へのメールおよび学会ホームページでお知らせする予定です。

2003年度 関東地区研究会

日時：2004年3月13日(土)午後2時30分～5時30分

場所：立教大学12号館地下1階第2会議室

話題提供者：

1. 猿田佳恵子氏(立教大学大学院)「外国人への子育て支援—新宿区の保育園のフィールドワークから」
2. 北原賢三氏(佐野学園理事室)「日本の大学組織とその国際化—事例研究から」

終了後、懇親会の予定。詳細は2月初旬に会員へのメールおよび学会ホームページでお知らせする予定です。

2004年度関東地区研究会

日時：2004年6月12日(土)午後2時30分～5時30分

場所：青山学院総研ビル3階第11会議室

話題提供者：

1. クリス・オリバー氏(立教大学)「多文化主義のない日本—コミュニケーションの可能性をめぐって」
2. 三輪真木子氏(メディア教育開発センター)「情報行動研究の手法—量的研究と定性的研究」

終了後、懇親会の予定。詳細は4月下旬に会員へのメールと学会のホームページでお知らせする予定です。

訂正とお詫び

前号(3号)5ページの末田先生のお名前が一部間違っていて記載されておりました。お詫び申し上げます。

編集後記

ニュースレター4号ができました。今回は、2回目を迎えた全国大会の参加記を中心とした特集号です。お忙しいところご意見、ご感想をお寄せいただいた執筆者の皆様、ありがとうございました。今年は、すでに3つの地区研究会が計画され、学会誌の発行などいよいよ本格的な学会としての活動がスタートします。NLについてのご意見、ご感想、また新しい情報がございましたらNL委員会へご一報いただければ幸いです。

徳井厚子 灘光洋子

jsmrnl@nime.ac.jp

